



企画にあたって

猪又孝元

(新潟大学大学院医歯学総合研究科循環器内科学主任教授)

心不全は、「心臓がだんだん悪くなり生命を縮める病気」と定義され、時間軸を意識付けする「線としての」認識が広がりました。さらには治療ツールの拡充に伴い、基礎疾患や修飾要因といったベクトルが加わり、「面としての」治療構築が求められています。一方で、一個人から集団を見据えた心不全予防の重要性も高まりはじめています。いずれにせよ、その根底に共通するのは、「心不全診療は脚本書き」という視点です。例えば昨今、堰を切ったように心不全新薬が登場しています。ひとつひとつの薬剤は、大規模臨床試験の結果からもその有効性を疑う余地はないのですが、診療経過のなかでそのピースをいったいどうパズルに組み込むのか、ほかの治療ツールとどう組み合わせ優先順位をつけていくのか、現場の疑問は具体的な診断や治療の進め方に集中しています。Kaplan-Meier 曲線をいくら眺めても、その答えを導くことは困難です。臨床のいろいろな局面で実際に使ってみて、よい点や悪い点を感じ、そのなかで仮説を検証するがごとく試行錯誤を繰り返し、有用な実践法を提案できるものです。ガイドラインが概念主体の産物だとすると、診療マニュアル的な記載を網羅するステートメントが学会発信で増えてきたのも、そのような背景があるものと思います。そして、マニュアルという産物には、実践的な理解に適した思考と原理の裏付けが必要です。

今回の心不全特集では、私自身が今こそ整理しておきたいと感じている旬なテーマをピックアップし、マニュアル的な視点で読み解いていける構成を心がけました。多様化する現代の心不全診療において、包括的な観点にも追従できる形でエキスパートの先生方から現状とご意見をまとめていただきました。日常の心不全診療の脚本書きに、新たなスパイスを効かせる一助となれば幸いです。